

古代アジアを論証する(2)

**エジプト3000年の繁栄の事実は個人が
知識を独占せず広く皆に教え彼等もそれ
をよく学習し続けたのです。**

平成24年度定期総会記念講演 (2)

会員 矢吹壽年

(一)講演に先立って＝自己紹介を兼ねて私と歴史の関わりを話します

(二)戦前戦後の歴史観

(三)朝鮮半島との歴史観

(四)オリентと風水思想

(五)中国大陸との歴史観

(六)西アジアの文化が中国西北部に伝わった根拠

上記は“きび考”6号に掲載しました。その続を以下に“きび考”7号に掲載します。

(七)日本の縄文中期から弥生初期の頃の中国

5500～5000年以前は寒冷・乾燥化の時期で、喰いつめた新モンゴロイドの南下とチベット族(戦車を伝えた)の進入で母系から父系へ転換(強い男が価値を得た)した時代、黄河流域で防御性の高い城堡が出現します。(騎馬民族と戦車が用いられる)これは新モンゴロイド(トルコ系モンゴル族ツングス族)の南下による影響及びタリム盆地からチベット高原に進出してきた印欧語族(アーリア)の遊牧部族によって押し出されて黄河流域に脱出せざるを得なかったチベット族の影響と考えられます。

黄河中、下流域の龍山文化(4800～4000年)にはモンゴル族の影響が、満州の辺で起きた紅山文化(5400～4300年前)にはツングース族の影響が伺われ、黄河上流の馬家窯文化(～4700年前)長江上流域の三星堆文化(5000～3000年)にはチベット族の影響が考えられています。こうして一方では父系転換と私有制度が強まり他方では戦争圧力が強まる中、いわゆる中原地域において紀元前21～16世紀の夏・殷・周(周は前1100～前56年)王朝が誕生し、中国私権文明の歴史が幕を明けます。初期中国文明は西方チベット族と北方モンゴル族を巡る覇権争いの時代でした。

夏王朝をチベット族とする説と長江流域から北上した南蛮とする説がありますが、チベット族は先に長江流域に進出しており、制覇力となる武力(青銅器の武器・戦車)と言える点からもチベット族とみなして良いでしょう。米を食う民族は武力で他民族を制覇しないのであります。殷については(3050年頃)夏に従属していたモンゴル族とする説と西域からやってきたトルコ族とする説があります。楼蘭(ろうらん)の遺跡からヨーロッパ系白人の特徴を示すミイラが見られ、殷が青銅器の文化を持った事からトルコ族でも可能。殷が夏(か)の体制をそのまま引き継いでおり、殷で起った漢字の独自性や天信仰から見てモンゴル族による政権と考えて良いでしょう。

3100年前になる殷に服属していた周族(トルコorチベット族)と羌族(きょうぞく)(チベット族)が協力してモンゴル系の殷

王朝を滅ぼし、周を建国します。「山海経」(4～5000年前の地誌)には5帝が周辺各地を治め、その子孫が辺境の民族であると記しています。殷は羌族を生贄にしたといわれるが、初期中国文化は西方のチベット族と北方モンゴル族の中原を巡る覇権争いでした。

続く春秋時代(2770～2221 年頃)には弱肉強食の秦による中国統一に至る江南(呉・越)の現地民の逃走による難民が(倭族＝倭人＝タミル語を話していた)朝鮮(新羅)(加那)や日本(幡多氏)へ多数漂着してくるが、その後秦王朝(2200 年前)の専制政治にあつて日本へ計画的に脱出して来た徐福一派は男女3000人が30隻の大船団で最先端の軍備と職工と穀物の種を携えて朝鮮や日本各地に渡来して来たとされ、この計画的な移民が日本の弥生文化に与えた影響は大きいと思います。彼等は原中国人と東胡族系モンゴロイドの混血とします。(或は大伯氏＝邑久氏 呉・越から着た人々)

また長江の最上流からインドへ脱出することも可能な環境がある。よく日本語とタミル語の親近性が議論されるがインド南部に脱出した倭人勢力かも知れないと言う説がある。(この説の人は東南アジアのインド市場を知らない) ここで中国人が周囲の外国人を蔑視して東夷・南蛮・西戎(じゅう)・北狄＝匈奴と呼んだがイザナギに蛭子が生まれている。文化が低く中国人が蔑視するような物でも尊んで親しむ奴(民)か、倭人は自認していたのか。

(八)日本語の故郷と伝来の足跡

かつて日本語はウラルアルタイ語族として一括され日本、中国東北部(満州)、韓国等と同じ範囲で括られていましたが、戦後に安田徳太郎氏のレプチャー語起源説が出版され大反響を巻き起こしましたが、これに金田一の東大学派の大反対で沈没、以後反対した金田一派は新説、正統説を発表していないため朝鮮語こそ日本語の始めと多数の韓国人の自称学者が発表しましたが定説のないままに現在に至っています。

言語の考古学といった部門は、東大も京大も説は出していないのでありましょうか。言語考古は戦後放置されていました。最近新聞広告で東大の大野晋(すすむ)氏の「日本語の教室」を手に入れ、日本語はどこから来たのか」について大野氏は学習院大学で「江実(こう みのる)」先生に日本語の系統の講義を受けて居られていて、先生はアルタイ語の優れた研究家として知られ蒙古源流の翻訳等もなされていたが「蒙古語からは日本語と対応する単語は出ない」と云うことでした。江先生の云われるには南インドの「ドラビウダ語族は文法の構造が大体日本語と似ている、要注意だ。と研究を進められたのがきっかけでした。ドラビウダ語の辞書を求めて共通点の多いことに興奮したと書いています。

ドラビウダ族はインダス文明を開いた民族でしたが、紀元前2000年頃馬と馬車、戦車でインドに侵入征服した高貴な人＝アーリア人(ハラモン族)と称して、インドの支配者階級になり、タミルは南インド・スリランカに移動した。南インドの

**バラモン族が商売をなりわいとし、カンボジアへ
移動したと考えられている。**

それからインド大使館と連絡をつけタミル語を話す人を紹介してもらい研究が始まったのですが、話を続けるうちに「タミル(南インドの一族)にはヒンズー教より古い祭りがある。1月15日にする祭りで赤い米を炊いてそのお粥を食べると言う。大野氏の家では1月15日に小豆粥を食べる習慣があった。「砂糖を入れて食べるのですか?」と問うと「砂糖か黒糖と一緒に」と言うので驚いた。1980年から9ヶ月間新説を「言語」誌へ連載したところ、NHKから現地に行って調査をしないかと誘われ1月15日の行事を再現してくれる条件で行くことにしたそうです。

現地の村長婦人の炊き上げたお粥を皿に盛って梯子で屋根の上に登り「コウコウ」と鳥を呼んで、その粥を供えるのです。同行した九州大学の松原孝俊氏が「アツ! カラス勧請(かんじょう)だ」と叫びました。帰国して柳田國男の「歳時風俗語集」を見ると日本の1月15日の小正月の行事が詳しく書いてありました。後につぎつぎと判ったのですが、南インドの1月15日の「ポンガル」の行事と日本の小正月の行事には15項目にわたる共通項目があるのでした。例えば日本では各地でトンドという1月14日に正月かざりや書き物を焼く行事があります。南インドでも1月14日の晩に古いものを焼きます。青森県では1月15日に「ホンカホンカ」と唱えて糠(ぬか)を蒔いて家を廻る行事があると云う。南インドでは「pongalo pongalo」と唱えて、家を廻る練り歩く等です。ホンガの古形は日本語でポンガですし、菅江真澄の「すわのう

み」の天明4年(1784)の記事によると、長野県諏訪では1月15日の夜「ホンダラホ」と言って廻るとあります。これで大野さんは確信を得たようです。

日本語の研究は賀茂真淵(1697-1769)等の国学で始められた伝統のから、国学で行おうとするやり方がありますが、国語研究は法語学研究で行わないと国際的評価は得られません。かつてウラルアルタイで行われていた、研究との摺り合わせも必要ではないでしょうか。古代韓国、朝鮮語とのアルタミル語との共通点も、両国で調べれば面白い結果が出ると思えます。大野氏はこの本の中でインド南端のタミルと日本との7000キロあり、南インドから日本への伝来は陸路と海路が考えられる。陸路は途中で高い山もあり、どの道を通っても途中には別々の言葉を話す様々な民族が住む、これを経て来たとなると途中の民族の言語が混ざる筈であろう。それはタミル語の原形を変えて殆んど同一と決めるような、音韻の対応を不明確なものにしたであろう。と言うことは海路を考えなければならない。古代の航海術は陸地から4キロ以内の線をなぞって廻れば比較的安全に航海出来たようです。気をつけなければならないのは浅い浜や岩床と海賊です。

元航海士として世界一周を3回経験した岩田明さんが居ます。岩田さんは中東のシユメールと東南アジアとの関係に注目しておられ、ルーブル博物館に保管されている粘土板に楔形文字で刻まれた帆船一隻の製造のための材料表(使用材や木釘等の数表)を手に入れ翻訳し、その表の材料で南イ

ンドのケララ州のインド洋に面したヘイポールの造船会社に、表にある材料全部を使った帆船を作る依頼をした。出来上がった船は全長15メートル2枚の帆を張ったものでした。さすがにこの絵がないので解りませんが、後のジャンク船のようなものと想像できます。

南インドのタミル人(貿易をするバラモン族)の移住が東南アジアのアンコール・ワットやアンコール・トムに遺跡を残します。上記の吉村作治氏の著書もあります。最近九州にも同じ系統と見られる50年程前に確認された薩摩塔と言う石塔が発表されています。伽那ではまだ報告されていませんが、可能性は有りと考えています。

自らキャプテンとして乗り込み7人のスタッフと共にこれを操って1992年3月17日南インドを出発、スリランカを経てシンガポールに至り北上して台湾のキールンに寄り、沖縄の久米島沖で6月17日突然の三角波によって転覆するまで、航海できたといひます。麗沢大学服部英二教授に伺った話によりますと、マレー半島の中央の狭い部分にはベンガル湾側と南シナ海がわにそれぞれ港があったと言ひます。この二つの港の間を結ぶ20キロメートルあまりの山道があり、これを象に荷物を負わせ運んだ。そこに居たインド人はタミル人だったということです。もう一つ、七五調に近い調子がタミル語に存在するといひます。

朝鮮語とタミル語との間にも100語あまりの単語の対応が明らかになって来ました。加えてタミル語をインド北西隣のカンナダ語も朝鮮語との間に凡そ同じくらいの対応語を持つ事が分かって来ました。例えば日本語の fata(畑)とタミル語の paiukar(米作地)と対応すると見ていますが朝鮮語にも Pat(畑)

があります。日本語の Kuro(畦)とタミル語の Kurompu(畦)は対応しますが朝鮮語にも Kur.ang(畦)があります。米の生産のための土地の設備の名称が三国間で共通したということで、タミル-朝鮮-日本と言う三国の間で共通だと云うことで、タミル-朝鮮-日本と云う三者の米生産に何らかの関係があることを示唆しています。

これについては①のルート=タミル→朝鮮→日本 ②のルート=タミル→日本が考えられます。②とすると南シナ海から台湾まで来ると対馬海流に乗るわけで、対馬海流によって対馬海峡まで北上したら、右に折れれば北九州、左に取れば朝鮮半島南部となります。南インドから南シナ海を北上して来た船が南朝鮮、北九州とに同じ文明をもたらしたと云う考えは、強く作者の関心を引きました。金田一京助氏の支持も得ました。大野氏は言語学者で歴史的な面は素人なわけであり、台湾も謎が多く、或いは鍵が隠されているかもしれません。

私は先ず2年前に韓国の伽耶(かや)を2度目に訪問し伽耶山に登り高霊伽耶の伝王宮跡から磚(せん)を見つけました。瓦磚を捨得して国立博物館へ持参して来ましたが、その後、金海(きめ)に廻り金海伽耶王陵を観光しました。初代金官伽耶国王金首露王の妃はインドの「阿愉陁(あゆたや)国」の公主許氏を娶る。その経緯は詳細にはしないが、墓という物が残り拝観できます。回覧している写真集にありますのでご覧下さい。純粋なタミル語が入っているのではありませんが、王妃が公主であれば当然侍女数人も同居しますからどうでしょうか、色々考えられま

す。

(八)南インドからの東南アジアの古代交易

現在岡山市立オリент美術館で吉村作治氏の古代七つの文明展が開催されていますが、この吉村氏の書いた「東南アジアのアンコール・ポロブドール」に紀元 1～2 世紀頃扶南(ふなん)林邑(チャンパ)と呼ばれる国があり、ここにインドの商人が定着しインドと中国の商いを行っていたとあり、金官伽耶国の金首露王の即位は西暦 2 年頃であるから扶南のインド人が王妃になったとしても現実味がある。そしてタミル人がこの地の支配の娘と結婚するなどして、この地の支配者となる者も出てきたことは想像に難しくない。また古くからインド人のコロニーがかなり存在したことは間違いない。彼等はカーストの最高位バラモンであったが商業活動に従事していて、扶南の支配者はインド系であったが、林邑の方は漢族の地方官僚の子孫の区連と言うものが反乱を起こして建国したが、後に王統は何回も替わっている。

中国の殷王朝は商と呼ばれたと云うほど、商業活動を活発にしていたことが伺えるし、周も同様にインドと交易している。BC273 年インドのマウルヤ朝の王となった、アショーカ王は仏教に入信し、仏教の素晴らしいことを広く世界に広宣流布した。僧の木村日記が書いた「アショーカ王とインド思想」に依れば紀元前BC265 年に仏教伝道師をシリア、エジプト、マケドニア等に送り布教を行ったとある。これは石柱に刻まれた巖面刻文にあったと云う。推考すればこれらの国とは交易も行っていたであろうし、インドの船(軍船と考えられる)で派遣したであろう事も判る。

東南アジアの王朝は「東西貿易」すなわちインドからもたらされる商品は地元の香木、香料、樟脳などの産品とローマ、ペルシャの商品を中国の王朝に売り捌いて中国の磁器や薬品。染料、絹製品宝石の売買で利益を上げ、政権維持の費用の一部をまかなったことであろう。農民から取り上げた税のみでは鉄製の武器材料などの費用としては到底足りない筈である。また周辺にはかなり広大な水田稲作地帯を有していたに違いない。それによって膨大な人口と兵員が確保でき、王国としての独立性を保てたと考えられる。海上輸送は恐らく海軍にも似た兵員(船乗り)の護衛(戦闘力)が海賊対策として必要であったに違いない。近代イギリス海軍は海賊がその発祥だと云われている。古代の商船はどこでも武装商船であり、操船用の水夫だけでなく兵隊も乗っていたことは十分考えられる。時には自分達が海賊に早変わりしたこともあったであろう。娘を伽耶の王妃にすれば鉄の導入も容易で有利であったろう。現代の支店の様な店舗等も作ったのかもしれない。(倭寇だって同じと考えるべきではないか)

「南齊書」扶南伝によれば扶南は「為船八九丈 広栽六七尺」と云うようなかなり大型の船を持っていた。9 丈なら 21.6m幅7尺なら 1.61mと云う長細い手漕ぎの船だったようです。勿論外洋で使用する船はもっと幅広く、風向きによっては帆も使える形になっていたでしょう。これは扶南の港チャオとバンドンとの湾内連絡には十分な大きさでります。

台湾は四世紀まで中国の歴史に地名が出てこないとされています。次に六世紀(540

年ごろ) 流求と記録されます。6・7世紀では「瑠求」以降使用する字は変わるが、15世紀に明の時代、小瑠求と称して沖縄を含んでいました。16世紀に「台湾」と明記され沖縄が「瑠求」と記されています。このいきさつは不明です。北部の良港基隆を古くは鶏籠としているから、朝鮮神話(鶏林)とも関係があったのではないだろうかと考えます。

(九) ルートの考察

南インドからベンガル湾を東へ渡るとマレー半島に当る。古代はマレー半島の西側から陸路を東岸まで運び、そこから扶南や中国の寧波(ニンポー)まで運び、右に取ると北九州で北を目指すと朝鮮に至る。マラッカ海峡を通る航路は技術的に進歩を見た。もう少し後か造船技術の進歩が必要かも知れない。ただしマレーシア東岸を陸で運んだ辺りにはタミル人達の村があったと云う。陸路を横断するのに最短一週間程かかるが、同じ年の季節風(この場合南西風)で一挙に中国まで行けた可能性があり、インドシナ半島扶南(フナン)林邑(チャンパー)辺りまでは確実に行けたと思われます。面白いのは支石墓(南方系)のルーツと重なることであります。

別の情報によると中国の宋時代(10世紀)頃になるが、インドからマラッカ海峡を南下してスマトラ南部のパレンバンやジャンヒに行き、その辺りに中国から来た商品(主に陶磁器)を仕入れインドに帰って行くと言う方法があった。この時期の特徴は中国商人が自ら仕立てたジャンク(中国式大型帆船)で陶磁器等の積荷と共に東南アジアに出向いて来たことである。それは南宋の時代にな

って中国商人の海外渡航が市舶司制度によって公認されるような機構が出来た事が大きく影響している。

ジャンク船＝「ジャンクメール」のジャンクである。ボロ、中古、不良品のジャンクである。このジャンク船の船首付近の船底にガターボートと呼ばれる垂直板がついている。これは横風の際に船が風下に流されるのを防ぐ役目がある。また船尾に舵がない大型船になればなるほど舵も大型になる。舵はその上に伸びたまっすぐな棒を回転させることで舵が左右に切れる。しかし舵は方向を転換するだけでなく、横波やうねりを乗り越えたりすると舵に大きな力がかかる。したがって舵の棒を支えるのに堅固な装置が必要となる。しかし木造船の場合は、構造材に強度の関係からある程度から大きいものは作れなかった。

又舵は船底からかなり突き出さないとその役目をしない船本来の目的は「輸送」である。輸送のためには船に積み下ろしが必要となる。岸壁に接触すれば良いわけではあるが、近代まで港湾設備は貧弱であった。特に南海の島々にはさんご礁で囲まれている。さんご礁の内側は満潮時でも2m程しかないから、舵が邪魔でさんご礁の内に入れない。

大体サンゴ礁から波打ち際まで、500mから2kmもある。座礁の恐れもある、そこで船の両脇に取り付けて、サンゴ礁の内側では引き上げて本船が波打ち際に近づけるようにし、帆を降ろして櫂の代わりに使ったらしい。西洋の船より実用的であったと言われていた。ジャンクは西洋人の悪口とも言われる

が速度、運搬量とも当時一流であって、西洋人の東洋蔑視のアダ名であった。

ここで遊牧民が便利に使った火打ち石について、御存知でなかったら関東の青少年の家で行う使用法についてお話してみたい。鋼鉄片の火打鎌(杵とも)に硬い石を打ち合わせて出る火花を火口(ほくち)に点火する「花火式発火法」に用いる石と鋼。古くは燧石(ひうちいし)とも表記、英語名のflintという語はライター用の合成石で異なります。材質としては玉髄、チャート、石英、ジャスパー、サヌカイト、黒曜石、ホルンフェルス等の硬石を用いています。(全部新・旧石器の材料であったと指摘できます)

日本における火打石は「古事記」に倭建尊が叔母の倭姫から授かった袋に入った火打道具を用いて難を逃れた話が知られ、又養老律令軍防令において兵士50人ごとに火鍬具(ひきりぐ)と熟艾(やいくさ)一斤(モグサ・ガマの穂等で作った火口)の携帯を義務付けていました。常陸国風土記には同国が火打石の産地であったことが記されています。

久慈川の支流域で採掘された白い玉髄製の火打石は江戸にも出荷され「水戸火打ち」と呼ばれました。硬く減りにくく最高級品でした。蓬(よもぎ)を五月頃に刈り取り陰干しして完全に乾燥させ、新聞紙等を敷き上で手で揉むと葉緑素の部分が粉となって落ちる。残るのが艾(もぐさ)で、これを蒸し焼きにすると火口の完成です。木を薄く剥いだへぎの片端に硫黄を煖(あたた)めて、付けると付け木が出来ます。火口に切火を打ち、

火口に火がついたら軽く吹き火を大きくします。これに付け木をあてて軽く吹くと燃えつくのです。硫黄は漢方薬屋で手に入れることが出来ます。日本の特産物でもありました。

これが遊牧民の知恵で、これが無いと夜に火がなくて食事ができないのです。肉なら目の前に沢山いるのです。彼等は全天候の中で生きていかなくてはならないのです。雨でも雪でも霧でもどこでも火が得られる、彼等にとってこれが文化だったのです。「火口」さえ湿っていなければ、乾燥した時に木をこすって得る火より数倍便利なのです。



亀首峰かも知れぬ 亀頭である(陽石)



亀首峰丘の支石墓

妃の伝記によると南伝仏教かも知れない。石塔風である。



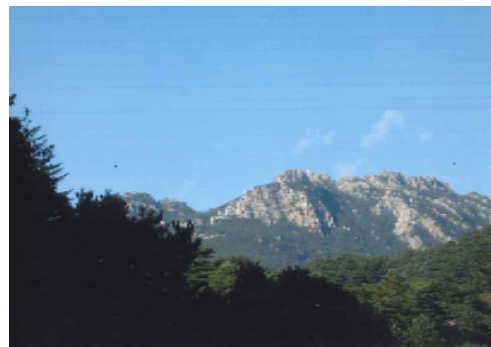
亀旨峰の立石



南方型の支石墓で上面に 亀旨峰石と浅く彫る。伽那族も南方渡来系かも知れない。



妃陵 後方の円丘は王陵



高霊伽耶国の伽耶山遠望

この麓に伽那山城、古墳群、王宮跡、寺院がセットになって存在する。